

車いすで 街に出てみたら

このビデオ制作にあたり、最初に撮影したのが、車いすバスケットボールチーム「東京愛好クラブ」の練習試合でした。スピードとパワーに圧倒されたことは言うまでもありません。ルールは一般のバスケットボールとほとんど変わりません。ゴールのリングの高さもです。時々車いすが前のめりに転倒します。それほど激しく、スピード感のある動きに見とれてしまいました。

ちなみに、車いすバスケットボールは日本の障害者スポーツの草分けといわれ、現在「日本車椅子バスケットボール連盟」には89チーム、およそ1100人が所属しているそうです。

「東京愛好クラブ」の監督、玉川敏彦さんをはじめメンバーの方には貴重なお話もたくさん伺うことができました。車いすで街に出てみて、不便に思うこと、困ること…、みなさん口を揃えて「段差がとても多い」、「狭い道に自転車を止めてあったり、荷物が置いてあって通れない」ということでした。また「車いす用のトイレに鍵がかかっていることがあった」、「ドアが閉まらない」と、トイレの問題は切実です。

「勤め先がビルの4階、エレベータがないので自分で上り下りしています」という青年がいました。座ぶとん替わりになるものをおしりに敷いて、一段一段上るんだそうです。「人の手を借りるより早いから」といわれた時には、少し考えさせられました。「できる限り、自分の力でやりたい」という一言も印象に残りました。

私たちにできることは何だろう？ 子どもたちにできることは……？ 少し混乱していると、

「困っている様子を見たら、とりあえず声をかけてください。必要ない場合は大丈夫です、と言いますから」

やはり、コミュニケーションが大切、という思いをかみしめましたが……。

こうして撮影初日にして頭の中はパンパンです。その頭が少し軽くなったような気がしたのが、中学生の柴山祐さんの撮影で碑文谷公園に行った時です。動物クラブの子どもたちとのふれあいはとても微笑ましく思いました。祐さんに対する優しさ、思いやりがあるのです。それがとても自然に……。

障害のある人とのコミュニケーションは、「優しく、思いやりをもって接すること…」というより、ちょっとした優しさと思いやりの心があれば、コミュニケーションがとれたバリアフリーの社会が自然に作られていくのではないのでしょうか。

大澤 葉子

(おおさわ ようこ クリエイティブ ネクサス ディレクター)